

トピックス

1. 播州日誌 緊急事態宣言

2. 社労士への道 第9回「絶望の淵に」



福留経営労務管理事務所

姫路龍馬会

社会保険労務士・行政書士

福留章

# 龍馬通信

No. 41

2021年5月号

## 立夏 小満の候 小さな幸せを求めて

淡くやわらかな季節を過ぎてエネルギッシュな初夏の到来。新緑をわたるさわやかな風、透明な空気、空の青さに心奪われる。「立夏」暦の上では夏。めぐりめぐる季節はコロナ禍とは関係なしに移ろっていく。今までよりは良い未来に向かって。花を愛で風を楽しむ心の隙間にいつもいつの間にかしのび込んでくるコロナの影。思いつき振り払おうとしても見えない敵になすすべもなく。静かに終息を待つ。そんな日々がいつしか日常となり暮らしの中に定着しつつある。「小満」本来の意味は農作業も一段落して一安心、一寸と満たされた気分になる頃との意。一安心といえばワクチン接種が順次行われているが全体的に遅々として進まない現状。誰が悪い、何が悪いの議論もむなしく空を切る。こんな時こそ、小さな幸せを見つける絶好のチャンス。ままたらない人とのふれあいの中でほんの一時、触れ合えた時の喜びを大切にしたい。もう少し、もう少しの辛抱を。やがて笑い声溢れる時が来ることを信じて。



※ 立夏 5月 6日頃

※ 小満 5月21日頃

## 龍馬と私 海援隊

後藤象二郎は龍馬が属していた「土佐勤王党」を弾圧した人物でありいわば仇敵であった。しかし時代の流れは急であり、政治情勢は大きく変化し時流に取り残されない道を模索していた土佐藩にとって龍馬の存在は大きかった。龍馬の幅広いネットワークと卓越した政治力を利用したい。また龍馬の方も亀山社中の経営を軌道にのせて政治活動に専念したいという思惑があった。

乙女にあてた手紙で「私一人にて五百人や七百人の人を引て天下の御為するより二十四万石（土佐藩）を引て天下国家の御為致すがはなはだよろしく…」と心境を語っている。両者の意見が一致した結果、龍馬は脱藩の罪を許された。亀山社中は再編成され「海援隊」と改称して新たに出發することとなった。

時に慶応3年（1867年）4月のことであった。海援隊のユニークさはその応募資格や海援隊思想に表れている。

応募資格

①かつて本藩（土佐藩）を脱するもの ②他藩を脱する者 ③いずれも海外（世界）の志ある者

そこには武士でなければならないなど身分に関する条件はない。集結した隊員の出身階層は土佐の郷士、下士、町人農民、漁師、他藩の元藩士などさまざま。

約規は五則。①隊士社員の資格と経営目標 ②隊長（社長）の権限 ③隊士社員の義務と約束 ④⑤隊中で修業、勉勵する分課内容

その中で事業内容として「運輸、射利、開拓、投機」で隊員各自の志願によって部署や仕事を選ぶことができた。まことに民主主義的な組織であった。「射利」とは手段を選ばず利益を獲得しようとする事。龍馬は金もうけを否定していない。開拓は開拓と同意。ここにはないが出版事業も手掛け数冊の本を刊行した。その数は火夫や水夫を合わせて約50人だったと言われている。土佐藩の脱藩浪士を中心に越前藩 関義臣、小谷耕藏他。越後長岡藩 白峰駿馬他。紀州藩陸奥億陽之助（宗光）といったメンバーだった。

一口に言えば、海援隊は日本ではじめての西洋蒸気船を使用する運輸貿易商社で海軍も兼ねた会社であった。土佐藩の外部組織であったにもかかわらず、脱藩者が多いこともあって藩意識もなく、派閥もなかった。海外を志す人々の集まりであり平和主義、能力主義に徹していた。龍馬の海外へ出て貿易をするとの夢は一応の結実をみたことになる。



## 播州日誌

### 「緊急事態宣言」

3度目の非常事態宣言が発布された。狼少年の寓話を持ち出すまでもなく、このように繰り返せば効果が稀薄になるのは自明の理である。飲食業をはじめ、大型商業施設やエンターテインメントの世界でもその落胆ぶりが目に見えるようだ。少なくともこのような国をあげての決定や発布は絶対に守らなければならないミッション（使命）に基づくものでなければならない。コロナ禍でのミッションとは「国民の生命を守る」ことである。経済活動への場当たりの思いやりや政治的外交的都合によって決められるべきものではない。幅広い専門家の具申を総合的に判断し、命を守るミッションにこだわるべきだ。東京オリンピックについては常識的に考えて開催に反対する。世界的な流行が続く中、さらに変異株が続出している現状。日本のワクチン投与が必ずしも順調でないことから考え、アスリートの不安や多くの役員や随行員を迎えることは危険極まりないことである。「国民の命を守る」この事を考えれば常識的に中止が妥当であろう。やりたい気持ちはわかる。しかしそれが一部の人の都合（利権）によるならばゆるされることではない。勇気ある撤退が今こそ望まれる。

2021.4.22

### 「非常事におけるせい弱性を考える」

日本を愛する者にとって昨今の日本の実情を見ると、情けなくもう失望の連続とっていい。日本はもっと強い国、弱者に優しい国、品格のある国民性などの思いが、そうあってほしいという期待もあって私の身体にしみついていた。コロナ禍、この非常時にあって確固たる自信をもってもの言う人はいない。一国の総理が「すまなかった」「申し訳なかった」と頭を下げ続ける。誰が悪い、何が悪いとつくづく考えてみるが容易に答えが出てこない。ワクチンの投与が順調にいかないままで医療崩壊が起これ、JOCからは看護協会に看護師500名の支援要求を出している。どこか狂っている。医療崩壊の中で多くの医療従事者が医療現場で不眠不休の奮闘しているというのに。過去のワクチン投与の失敗（B型肝炎）にこりて日本全体にワクチンアレルギーがあるのだろうか。

いつの間に日本はこんないい加減な国になってしまったのだろう。50歳くらいのホームレスの女性がバス停で殴り殺された。そんなことにも何の違和感をも感じない多くの人々。

自粛要請に耳をかさず路上飲みをする若者。今日より良い明日を考える言動が今こそ必要だと思う。

2021.4.25

# 「社労士への道」

## 第9回 「絶望の淵に」

開業して3年目の春、平成10年。浅田農産を始め、10軒近い顧問先を持ち、ようやく社労士の道を歩み始めた頃であったと思う。突然に事件は起こった。

いつも通り早朝のアルバイト、スーパーで品出しの仕事をしていた時、当時嫁いで近くに住んでいた娘からの電話。「お母さんが、お母さんがアブナイ。」絶句する娘のただならぬ気配を現実として受け止めることができないまま、段取りだけつけて急遽自宅へ戻る。

リビングへ駆け上がって見た光景を今も忘れない。「ごめんなさい、ごめんなさい。全部、全部私が悪い。」「お金が…お金が欲しい。」娘に支えられながら泣きじゃくる妻の手にロープ。「死なせて…。死んでお詫びする。」「お母さんがもう終わりや、もう終わりや、言うて…。」娘の報告も上の空で聞いた。泣き声と励ます娘の言葉が入り混じって…。そんな状況が1時間程続いた。立ち尽くす私。

「お父さんは仕事一生懸命、頑張ってくれたけど、お金がどうしても足りなくて…。」妻は半狂乱になっていた。今、目の前にある現実を現実として意識するには時間がかかった。

訳もわからぬまま、私は細く小さな肩を抱きしめて、「どうした。お前は悪くない、わかったからもういい、もういいから泣くな。」

ようやくしぼり出した私の言葉に彼女はちょっとだけ安心したようだった。なおも詫びながら泣きじゃくる妻を寝室に休ませた後、書斎に入って一人じっと目をつぶって考える。後でわかったことだが、結局のところ、私の失業と同じ頃に収入のない状態から借金が始まり、次第に負債額が増えていった。当時自宅は店舗付きの住宅で3階建て、2階がキッチンとリビング、和室、3階に寝室と書斎。失業する2年ほど前、いわゆるバブル期に思い切り贅沢に建てたもので、結局これも大きな負担になった。

私の金銭感覚の鈍さが招いた災禍とも言える。退職金とそれまでの蓄えでしばらくは何とかかなるとの私の楽観と妻のひたすら私に苦しい現状を見せないという思いが大きな負債を抱える事につながった。今の収入でどうやって多額の債務を返済するのか。借りたものは返さなければならない。始めの頃そういう思いが強かった。頭の中がグラグラ揺れる感じで立っていられないくらいの目まいもした。

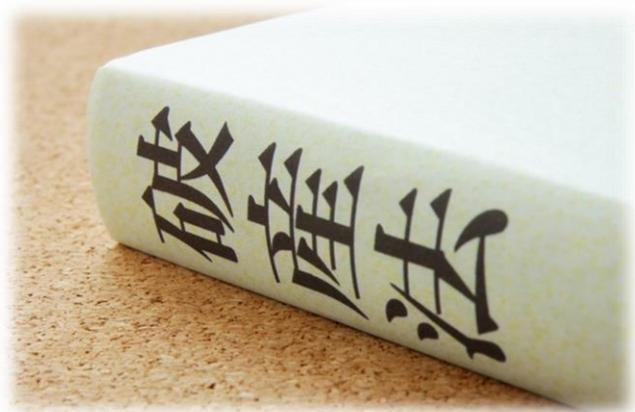
一日一日と日が経つにつれて、重圧から解放された妻は少しずつ元気を取り戻していった。白けたムードの食事何となく慣れてきて色々な話をするようになっていった。大根一本の値段など全く頓着のなかった私、おそらく予兆はあったはずなのに、私の能天気な性格が彼女を長い時間苦しめた事になる。借金地獄のさなか、私はそれでも自由に生き毎日酒を飲んでいった。



多額の借金、金を借りる事など疎いはずの妻が、ありとあらゆる手段で借金を続けた。おそらく開業当初からそんな状態になっていただろう。そうだとすると平成6年11月頃となる。私は新米の社労士として、できるだけセミナーに参加し、本を読み、社労士として生きていく道を模索していた。家を省みない私に嫌な思いをさせないでおこうとする彼女の献身。しかし彼女の心と体は極限まで追い詰められていたはずだ。さぞつらい毎日であったろうと思う。根の所で彼女は私を恐れていた。暴力こそなかったがたまにあった言葉の暴力で彼女の心を引き裂くのには十分だった。衝撃は次第に薄れていったが現実の問題は日々切迫していった。「借りたものは返す」かたくなに思いつめた事が問題の解決を遅くした。苦勞して工面した数百万円を業者に頼んで債権額をまけてもらい支払ったりもした。顧問先が増えていったことで入金が目途があった事も幸いであった。

日々をやりくりしながらもその実 私の社労士としてのプライドも体面を気にする見栄張りな部分もズタズタに切り裂かれ、うかつにも妻を激しくなじったりすることもあった。ある程度の返済をした後、彼女から破産の話があった。

ほとんど妻名義の借金であったので、破産が通れば随分と楽になる。絶対に返すと決めていたが正直、力が尽きかけていた。色々と事情を聞いてみると随分と悪質な業者の姿も浮かび上がってきた。次第に多くなりつつあった電話や来訪しての追い立ても日々厳しさを増していた。知人からの勧めもあり、平成10年8月、厳しい暑さの中、姫路市内の弁護士事務所を妻と二人で訪れ、自己破産の申立てを委任した。「同じ士業ですね。」と弁護士から言われた時、胸にグサリと突き刺さるものがあった。受任通知書が債権者に届いたところから追い立てはピタリと止まった。



しかしその直後に執拗な追い立てを繰り返す業者がいた。その日私は姫路市砥堀の事務所には7時半すぎに娘から電話がありこわい人が3~4人家に来ているから帰ってこないようにとの連絡があり、さらに8時を過ぎてから「警察に電話して。こわいからもう嫌や。」と電話があった。当時はサラ金ブームといった状況で高度経済成長の徒花のように街中に貸出ボックスが乱立していた。追い立てに苦しみ命を絶つ人も続出するような世相。そんな中で規制がかかり、8時を過ぎてからの追い立ては違法となる。警察に電話をして事情を話す。決して警察は庶民の味方ではない。散々嫌味を言われた挙句、「旦那は借金取りが恐くて家によく帰らんらしいわ。」とわざと電話口で同僚と話す声。それでも数名の警察官が出勤し、騒ぎはおさまった。この日から近所でも私の家の苦境が噂として流れた。

妻の自己破産の申立てにより一段落した。しかしその頃が奈落の底。絶望の淵に立ち、薄氷を踏むような毎日だった。ただただ時間の経過を祈り、時間の経つことだけを考える毎日。少し先の方が、明日の方が、明日より明後日の方が、何か少しは改善するかもしれない。いや、しないかもしれない。砂をかむような日々が続く。しかし仕事の事だけは頭を切り替え元気一杯にこなしていた。それが気分を紛らわす特效薬でもあった。

人前ではできるだけ明るく振舞った。仮面をかぶって過ごす毎日。昼と夜とのギャップがより強く胸を痛めた。眠れない夜。泣くことは苦しみを軽減させる。しかし人前にさらす訳にはいかない。勿論妻の前で泣くわけにもいかない。家族を困らせ迷わせ生きる力を削ぐことになる。泣くなら人知れず泣かなければならない。事務所はそういった意味で絶好の場所であった。ある日窮状を知った人が事務所に来てくれ、夜食を差し入れてくれた。「きっとええ事もあるから、今は我慢、我慢やで。」そんな言葉を残して二人が去った後、しんと静まり返った事務所で差し入れのぶっかけそばを食べようとしたとき、本当に本当の悲しみが体中に溢れて思い切り泣いた。泣いても泣いても涙はかれることがなかった。そんな状態の中で私はふと死を思った。こんな苦しみを解消するには自分の存在を消すことが一番ではないか。手にはテレビコードが握りしめられていた。昔、ある人から刑務所の中で囚人が自殺する方法というのを聞いたことがあった。ドアノブにコードを渡し、首に巻く、低い位置のドアノブでも思い切りのど仏をつぶすように圧迫したら死ぬと。震える手で2度、3度強く首を圧迫する。痛い、そしてこわい。再び涙がこぼれた。自分は何をしているのだろう。その時、私は確かに「大いなる者」の声を聞いた。今でも覚えている。それは「生きよ、自分のために生きよ。」という言葉であった。



産休育休をいただいております、事務員の江平です。

4月月末より復帰致しました。産休育休取得にあたり、皆様には感謝しております。

これから勤を取り戻せるように頑張ります。よろしくお願い致します。